

日本都市社会学会ニュース

NO. 120 (2021. 11. 29)

※ 事務局が移転しました

事務局：〒825-8585 福岡県田川市伊田 4395

福岡県立大学人間社会学部公共社会学科 堤圭史郎研究室

e-mail: usocio@urbansocio.sakura.ne.jp TEL: 0947-42-1718

(振替口座: 00140-4-703976) URL: <http://urbansocio.sakura.ne.jp/>

会長就任にあたって

浅川達人（早稲田大学）

2021 年 9 月 11 日の日本都市社会学会第 39 回大会総会で会長に選出されました。浅学な私にこのような大役が務まるか大変不安ではありますが、新たに選ばれた理事のみなさまと一緒に、学会活動の活発化と発展のために尽力して参りたいと存じます。

10 年以上前となりますが、私が本学会事務局担当理事を拝命し会計を引き継いだ時は、学会の財務状況は危機的状況にあり、前年度と同じ財政規模で運営すれば赤字に転落するという状態でした。その後谷富夫会長が、滞納している会員に会費納入を呼びかけると同時に会費の値上げを行うなど会計の健全化を図り、広田康生会長、玉野和志会長がそれを継承し、さらに発展させてくださいました。現在では、新しい世代の研究者を養成するための基金を設置するだけの財政的余裕も生まれました。この間の学会運営に関わってくださった多くの先輩方のご尽力に深く感謝申し上げます。

コロナ禍に翻弄されたこの 2 年間は、大会をはじめ理事会や各種委員会もオンライン開催となりました。オンライン開催には、時間的・金銭的コストを大幅に削減するというメリットがありますが、会員同士の懇親の機会を減少させ、若手研究者が研究のネットワークを広げる機会を奪うというデメリットを伴います。with covid-19 時代に、どのように学会を運営していくか。理事のみなさまはもとより、広く会員のみなさまからのご意見を承りながら、考えていきたいと存じます。会員の皆様のご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

第 39 回大会の報告

小山弘美（関東学院大学）

日本都市社会学会大会第 39 回大会は、2021 年 9 月 11 日（土）・12 日（日）の 2 日間、昨年に引き続きすべてオンラインで開催され、参加者は 85 名程度と盛況であった。報告者の発表資料はグーグルドライブに保存されており、わかりやすい参加マニュアルも配布され、どこからでも気軽に参加できる学会大会の仕様がますます充実してきた。学会事務局や大会事務局のご苦勞に感謝したい。一方で、対面のやり取りがない大会の継続はやはり味気ない。部会後のちょっとした立ち話や、久しぶりにお会いする先生方との近況報告によって、自らの研究に対して見通しや活力をもらっていた。あらためて学会大会のこうした潜在的機能の重要性を確認したが、今年度は各部会後に 10 分間のアフターセッションの場が設けられ、発表者より詳しく聞きたい参加者とのやり取りがなされた。部会後の立ち話を横で聞いていてもよいといった感覚で、大変興味深かった。

大会初日は自由報告部会が 2 つ（計 7 本）、ラウンドテーブル（話題提供者 4 名）、テーマ部会（報告 4 本）、2 日目は自由報告部会 2 つ（計 7 本）、シンポジウム（報告 3 本）という構成であった。今回の大会参加を通して大きく考えさせられたことは、大きなサイズのデータを扱うことが手軽になってきたことによる、調査法や分析手法の変化である。マクロなデータとミクロなデータを突合する調査設計や、これまで社会学では主に質的にしか扱われてこなかったような、メゾレベルの指標を加味したマルチレベル分析による「近隣効果」の検討といったものである。これらには、高度な数理的な知見や、他分野や海外における研究成果にも精通していることが求められる。報告者からも「勉強が足りない」という言葉を何度か聞いたが、個人ですべてをフォローすることには限界がある。データサイエンス的手法が、分野を問わず

求められる時代に、社会学の一分野の学会として何ができるのか。転換期の学術的交流の場として、学会運営にもさらなる工夫が求められているように感じた。

さて、2022 年度の第 40 回大会は実践女子大学で開催される。渋谷駅近くの好立地キャンパスでの開催ということで、3 年ぶりに対面で多くの会員の皆様とお会いできることを願う。

第 39 回大会で開催されたラウンドテーブル「国境を越えた調査の実践」についての報告

大会初日の 9 月 11 日 12:00~13:20 にランチセッションの形で、ラウンドテーブルが開催された。当日は国境を越えて行われるフィールドワークの実践に焦点を当て、以下 4 名の方から話題提供を受け、約 50 人の参加者を得た。まず、各話題提供者からそれぞれの個人的なバックグラウンドを含めた自己紹介やこれまでのフィールドワークの概要、実際の調査において経験した問題などについて報告がなされ、その後、参加者を交えた議論が行われた。話題提供者および参加者より提示された議論の詳細は下記に譲るとして、ここでは 2 年ぶりかつ初のオンライン開催となったラウンドテーブルの工夫と意義について、次の 2 点を中心に記しておきたい。

第一に、これまでのラウンドテーブルの在り方としては、約 5 分の報告時間を設定し、それを比較的きっちり守ることで議論の時間を十分に確保するという方針が維持されてきた印象がある。これに対して、今年度はあえて時間制限を緩め、オンラインという慣れない環境において各話題提供者が腰を落ち着かせて自由に話すことができるよう、工夫を試みた。その結果、参加者を交えた議論の時間が通常より短くなってしまったが、その分話題提供者の話を丁寧に聞くことができたので、一長一短と言えるだろう。

第二に、今年度の開催を通じて、とりわけ若手研究者にとっての相互交流の重要性を改めて認識した。参加者間の自由なコミュニケーションが重要視されるラウンドテーブルの特性上、オンラインでの議論がどこまで盛り上がるかについて、企画委員の間では心配もあった。しかし、当日は各話題提供者や企画委員などを中心に雑談を交えたアフターセッションが予想終了時刻より長引き、長期化するコロナ禍において何気ない交流の機会が重宝されていると感じた。「世代を超えた研究交流を図る」というラウンドテーブルの趣旨が、思わぬ形で確認された大会であった。

(企画担当委員 金善美、横田尚俊、西野淑美)

エスニシティという境界の強固さと柔軟さ

申惠媛 (東京大学)

筆者は、これまで取り組んできた「新大久保」調査の経験をもとに、海外調査とはまた似て非なる形の「国境を越える調査の実践」といえる国内エスニック・コミュニティ／タウン調査の魅力と課題に関する話題提供を行った。今回取り上げたのは、東京都新宿区大久保地域の新大久保エリアを拠点とする韓国系ニューカマービジネス経営者の団体およびマルチエスニックなビジネス経営者による会議への参与観察の経験である。調査を進めるなかで、限定的ながら強固な「エスニック・コミュニティ」の手触りを感じた一方、エスニシティそのものの曖昧さやエスニックな垣根を行き来するような実践を目の当たりにしてきたことを、エスニシティという境界の強固さと柔軟さとして紹介した。

議論の中で特に印象に残ったのは、「当事者性／外部者性」の活用に関する様々なご経験をうかがえたことである。筆者自身も属性による調査への影響に悩み、登壇者への問いとして提示したが、いずれの方々もこれを強かに活用しながら調査に取り組まれていることに勇気づけられた。また、自身の経験や研究の内容からエスニシティやナショナルリティを批判的に検討しながらも、調査や執筆の場面ではこれらのある程度明確に表明ないし記述せざるを得ないことを共通に抱える課題として確認できたことも心強く感じた。

コロナ禍で行動半径が狭まり新しい交流の場が限られているなか、オンライン空間であっても、集い、経験を共有することがもつ意義を改めて強く実感する貴重な場となった。ラウンドテーブルを企画・実施してくださった先生方、当日ご出席いただいた皆様に感謝申し上げます。

インドネシアにおける調査のしきたりとその魅力—現地研究者と密な共同研究をするには

細淵倫子 (立教大学グローバル都市研究所)

本ラウンドテーブルでは「国境を越えた調査」という共通論題において、海外（アジア）で調査をする研究者としての「異質性」と与えられるまなざしについて問題提起をした。具体的には私自身がインドネシアでおこなってきた 17 年間のフィールド経験から得た知見をもとに、インドネシアという、国籍やエスニシティ、地域、階層等の異なるフィールドにおいて、「顔」を変えながら、いかにインフォーマントである彼ら・彼女の状態＝「語らない・語れない人々の声」を具体的に描き出していくのかという話題を提供した。また、若手研究者として現地（海外フィールド）に入り、現場の研究者（インフォーマントと国籍は同じといえども、同じような経験をしたことのない人々）と事象を共有していく手法についても言及をおこなった。

全体のラウンドテーブルで興味深かった点は、一見おなじ「ルーツ」や「手法」に見えても、1) 研究者としての多様性があるということや 2) 「他者」としてのまなざしが常について回ることについて共通の理解があったことである。また、これまで本学会では、若手の海外調査での研究のプロセスについてなかなか議論されることがなかったが、今回のラウンドテーブルにおいて、若手研究者自身の当事者性が浮き彫りになり、「研究する私たちの存在」自体に焦点が当たったことも、私の興味をかきたてた。

以上から、本ラウンドテーブルを通し、研究をする自分を改めて鑑みることもでき、分野や領域を超えた先生方と議論することで、「国境を超えた研究」の特異性を知ることができた。また本学会において「外国をフィールドとした研究はどのようにとらえられ、考えられているのか」を知ることのできる良い機会ともなった。

そして、なによりも同世代に共有できる仲間がいるということに、うれしさを感じ、心強く思った。コロナ禍でなかなかフィールドでの調査がうまくいかない時節に、このような機会を頂けたことは、私の研究心をより奮い立たせるものになった。

都市政策の越境的調査と「生活経験としての属性」

上野貴彦（一橋大学大学院）

報告者は、「インターカルチュラル・シティ」を標榜する欧州都市の移民統合政策について、移住当事者を含む多様な住民参加に照準し、バルセロナ等で調査してきた。それを踏まえて前半では、研究と行政・NGO による政策形成の垣根がとりわけ欧州では低く、この研究・政策形成連関が構築したナラティブを鵜呑みにせず都市全体の変化に目配せし、歴史・空間的文脈の再検討から戦略的な調査地を探る試みが極めて重要になっていると報告した。

後半の議論では、エスニックに定義しきれない調査者の当事者性が議論の核となった。例えば報告者の場合、スペインの行政と研究者の協働という文脈から切り離された「蚊帳の外」から調査することを余儀なくされるが、外部の立場を逆手にとって「傍目八目」を活かそうとするあまり「日本人／アジア人」としての自己定義に拘束される危険もある。フロアからご指摘いただいたとおり、「自分が何を知りたいのか」を問い直し、他分野の知見も柔軟に取り入れる姿勢が肝心である。その際、王昊凡先生が指摘された、「自らの生活経験が構築した属性」をめぐる再帰性の検討が鍵となると思われる。

論文に発表できる知見は、（とりわけ私の場合は力不足により）限られる。そのなか、調査や発見点の整理段階で言語化しきれずに「お蔵入り」としたエピソードを掘り起こし、参加者の皆様と共有することは、個々の事例の特殊性と普遍性の双方を再発見する学びにつながった。ただ、単純化しがたい事象が多だけに話を短くまとめるのがもったいなく、時間不足ではあった。それについても、（フロアの皆様には恐縮ながら）終了後に司会・話題提供者だけで「裏話」をする時間を長く設定するという、委員の先生ほか皆様のご配慮がありがたかった。改めて、本ラウンドテーブルの企画・実施に尽力してくださった関係者全員にお礼申し上げます。

中国上海の寿司店を調査する：「日本の消費者」視点からの脱却

王昊凡（中部大学）

筆者はラウンドテーブルにおいて、自身が行ってきた調査をふまえ話題提供を行った。前 3 名の報告と同様、調査者のルーツや属性がインフォーマントとのコミュニケーションに影響したことについて話題を提供した——国境を超えた実践を行っている者どうしであり、かつ「男性」どうしであることが、調査を円滑にするいっぽうで、フィールドの特定の側

面が強調されがちなデータとなり、時として困惑した。また、「マージナルマン」としての属性をもつこと、あるいは研究者コミュニティでの位置づけ（日本の学会や学術誌で、中国にルーツを持つ人物が中国をフィールドとした研究を行っていること）といったかたちで、研究それ自体に影響を与えることについても触れた。

個人的に印象に残ったのは、ラウンドテーブルでは議論をする時間がなかったものの、「調査は問いにアプローチするのが大事だ」という趣旨のコメントである。フィールドでは、まったく想定していなかった新規性の高い現実と直面することがあり、それに対してどのように問えば〈社会学として〉アプローチしたことになるか、構想をたてることは容易ではない。そのためには既存の理論や分析枠組み等ふまつつも、柔軟かつ創造的に試行錯誤し、ときには新たな視点を導入する必要があるだろう。実を言えばこれは筆者が寿司店の調査を行っていく上で、どうすればよいか悩み続けていることでもある。

このように、国境を超えた調査実践はたいへい、試行錯誤の連続であり円滑ではない。それゆえ、本ラウンドテーブルのような、経験や悩み、考え方や手法を共有する場は、たいへん貴重であった。そのような場に参加できたことを嬉しく思い、委員及び司会の先生方、話題提供者の先生方、フロアとしてお越しくださった先生方に感謝を申し上げる。

総会記録

総会は、大会1日目の9月11日（土）、下記の次第にそって、オンライン会議システムZoomにおいて行われました。

1. 開会の辞（浦野正樹常任理事）
2. 会長あいさつ（玉野和志会長）
3. 開催校あいさつ（妻木進吾会員）
4. 座長推挙（三隅一人会員を選出）
5. 諸報告

（1）2020～21 年度理事会報告

山本薫子事務局担当理事より、2020～21 年度の理事会に関する報告、併せて会勢及び会費納入率について報告がありました。

（2）2020～21 年度企画委員会報告

山口恵子企画副委員長より、2020～21 年度の企画委員会の活動について報告がありました。

（3）編集委員会報告

高木恒一編集委員長より、年報 39 号の編集作業過程、J-Stage へのアップロード作業状況、EBSCO への公開状況、年報 40 号の投稿募集について、それぞれ報告がありました。

（4）国際交流委員会報告

松宮朝国際交流委員会委員長より、韓国地域社会学会との交流等について報告がありました。

（5）役員選挙、選挙管理委員会に関する報告

玉野和志会長より、コロナ禍の特殊な事情に鑑み第 3 回理事会で選挙管理委員会メンバーを下記のとおり決定したことが報告されました。

委員長：大倉健宏／委員：阪口毅、仁井田典子、松尾浩一郎、松橋達矢。

（6）新入会員紹介

山本薫子事務局担当理事より、2020～21 年度の新入会員 11 名の理事会での承認について報告がありました。

（7）臨時総会（12 日 12:55～13:10）

山本薫子事務局担当理事より、翌日の臨時総会開催について報告と参加要請がありました。

6. 第 12 回日本都市社会学会賞（磯村記念賞）選考委員会報告

町村敬志選考委員長より選考課程および結果の報告があり、橋本健二・浅川達人編『格差社会と都市空間—東京圏の社会地図 1990-2010』（鹿島出版会 2020 年 7 月）を第 12 回日本都市社会学会賞（磯村記念賞）受賞作品とすることを決定

しました。引き続き受賞者の挨拶がありました。

7. 議事

(1) 郵送での役員選挙に関する件

山本薫子事務局担当理事より、2021 年度役員選挙を郵送で実施するに至った経緯について説明がありました。その上で、2021 年度の役員選挙実施方法は「日本都市社会学会役員選出規程」とは異なる内容ではあるものの、感染症拡大という状況であるための特別措置として提案がなされ、事後承認されました。

(2) 新入会員のオンラインでの役員選挙に関する件

山本薫子事務局担当理事より、第 4 回理事会（9 月 10 日）で入会が承認される新入会員の役員選挙への投票をオンラインで実施するに至った経緯について説明がありました。その上で、2021 年度の役員選挙実施方法は「日本都市社会学会役員選出規程」とは異なる内容ではあるものの、感染症拡大という状況であるための特別措置として特別措置として提案がなされ、事後承認されました。なお、三隅一人座長より規程について次期理事会で整えることが提案されました。

・選挙結果の報告

大倉健宏選挙管理委員長より、選挙経過、開票・集計作業の説明がなされました。回収数は 70 票、有効票は 68 票でした。投票結果は以下のとおりでした（敬称略）。

会長（1 名）浅川達人 15 票（次点：浦野正樹 7 票・有末賢 7 票）

全国区理事（4 名）山本薫子 17 票、有末賢 12 票、五十嵐泰正 10 票、文貞實 10 票（次点：武田俊輔 9 票・中澤秀雄 9 票）。

地方区理事（各地区 1 名）東日本地区：高木竜輔 11 票（次点：斎藤麻人 10 票）／東京都：山口恵子 13 票（次点：武田俊輔 11 票・中澤秀雄 11 票）／中部・近畿：山本かほり 13 票（次点：早川洋行 13 票。同票であったため選挙管理委員会による抽選により決定）／中国・四国・九州・海外：二階堂裕子 26 票（次点：横田尚俊 13 票）。

監事（2 名）鯉坂学 10 票・渡戸一郎 10 票（次点：浅川達人 9 票）。

(3) 監事に関する件

玉野和志会長より、監事に当選した鯉坂学会員と渡戸一郎会員より、多選（留任）を理由による辞退の申し入れがあったことが報告されました。現規程には多選（留任）を妨げる条文はないものの、監事の役職の性質に鑑み、お二方の申し入れを受諾すること、会長に当選した浅川達人会員を外した上でそれより下位の得票を得た方々 2 名を次点として扱う件について提案され、承認されました。また、玉野会長より、監事の留任を防止する規程の改正について将来検討することが併せて提案されました。

改めて大倉選挙管理委員長より監事の次点について発表がなされました。早川洋行 8 票、和田清美 7 票。以上を踏まえ、早川洋行会員と和田清美会員の繰り上げ当選とすることが提案され、承認されました。

(4) 2020 年度決算および監査報告

山本薫子事務局担当理事より、2020 年度決算について報告、次いで鯉坂学監事から監査報告があり、承認されました。

(5) 2021 年度予算案

山本薫子事務局担当理事より、2021 年度予算案について説明があり、承認されました。

8. 新事務局について

玉野和志会長より、事務局を東京都立大学山本薫子研究室から福岡県立大学堤圭史郎研究室へ交替することが提案され、承認されました。

9. 次年度大会について

玉野和志会長より、2022 年度の第 40 回大会を 2022 年 9 月 13 日（火）・14 日（水）に、実践女子大学で開催する予定である旨の報告があり、承認されました。また、大会開催校を代表して原田謙会員より挨拶がありました。

（座長解任）

10. 閉会の辞（浦野正樹常任理事）

（事務局担当理事 堤 圭史郎）

2020 年度決算報告および 2021 年度予算案

日本都市社会学会
2020年度 決算報告（2020年8月1日～2021年7月31日）

〔一般会計〕

単位：円

収 入				支 出			
項目	予算	決算	備考	項目	予算	決算	備考
入会金	20,000	25,000	13名（うち1名は1000円のみ支払）	消耗品費	10,000	21,757	封筒等
学会費	1,717,000	1,783,500	22年度 一般2名	通信費	50,000	64,288	郵便代（役員選挙等）
			21年度 一般：147名、学生：25名	ニュース印刷費及び業務委託費	500,000	392,633	ニュース117～119号・編集・印刷・発送作業・送料（300部）
			20年度 一般：88名（うち1名6000円の支払い）、学生：10名	年報印刷費	450,000	443,520	第38号（400部）
			19年度 一般：9名、学生：3名	大会開催費	100,000	20,000	第38回大会（アルバイト代）
			18年度 一般：11名、学生：4名	役員・委員会費	100,000	0	役員・委員旅費補助
			17年度 一般：1名	事務局費	100,000	128,441	事務局幹事手当、アルバイト代、HP管理費、振込手数料等
			終身会費2名	学会賞費	20,000	10,164	賞状、記念品等
広告収入	10,000	0	年報掲載広告	企画委員会費	150,000	0	非会員旅費・非会員謝金
雑収入	20,000	94,790	複写機使用料等	編集委員会事務局費	70,000	0	編集関係通信費、英文校閲費等、Jstageアップロード
年報販売	54,000	62,600	販売委託分	国際交流費	100,000	0	海外出張費・翻訳費等
大会参加費	0	2,000		社会学系コンソーシアム年会費	10,000	0	
				慶弔費	20,000	0	
繰越金	5,322,612	5,322,612		コロナ減額		54,500	一般（2500円）17人、学生（2000円）6人
				学会費返金		2500	20年度に学生会員に一般会員会費で請求していたため
				予備費	5,463,612	0	
計	7,143,612	7,290,502			7,143,612	1,137,803	

次年度繰越金 6,152,699

〔特別会計〕

留 保			支 出		
項目	予算	備考	項目	予算	決算 備考
将来構想基金	1,000,000		将来構想基金	200,000	0 19年度、20年度ともに対象者1名だが、支払い実績なし
残額					1,000,000

※単年度会計（毎年計上されるもののみ）	収入	1,821,000	支出	1,137,803
			差額	683,197

監査の結果、関係書類並びに会計処理は適正であり、2020年度決算に相違がないことを認めます。

2021 年 8 月 19 日

日本都市社会学会 監事

鯨坂 学

2021 年 8 月 24 日

監事

渡辺 一郎

収 入			支 出		
項目	予算	備考	項目	予算	備考
入会金	20,000	10名	消耗品費	10,000	文房具等
			通信費	85,000	郵便代、メール便代など
学会費	1,600,200	一般255名、学生35名 納入率9割で計算	事務局業務委託費(印刷費、 通信費を含む)	450,000	ニュース送料等
広告収入	10,000	年報掲載広告	年報印刷費	450,000	年報販売、ニュース(年間3回)編集・発送等
雑収入	90,000	複写権使用料等	大会開催費	100,000	第38号(400部)
年報販売	54,000	販売委託分(1,200円)×45冊分	役員・委員会費	100,000	第39回大会
			事務局費	120,000	役員・委員旅費補助
			学会賞費	20,000	アルバイト代、HP管理費等、振込手数料など
			企画委員会費	100,000	賞状等
			編集委員会事務局費	50,000	非会員謝金など
			国際交流費	100,000	J-stage作業代、英文校閲費等
			社会学系コンソーシアム年会費	20,000	海外出張費・翻訳費等
			慶弔費	20,000	(2021年度分、2022年度分)
			コロナ禍による会費減額	70,000	
繰越金	6,152,699		予備費	6,231,899	一般20人、学生10人
計	7,926,899			7,926,899	

[特別会計]

留 保			支 出		
項目	予算	備考	項目	予算	備考
将来構想基金	1,000,000		将来構想基金	200,000	2020年度分、2021年度分
残額				800,000	

第12回日本都市社会学会賞（磯村記念賞）作品と選考理由

2021年度学会賞選考委員会（以下、委員会）は、学会規約第2条第3項ならびに学会賞（磯村記念賞）内規の定めるところにより、第12回日本都市社会学会賞（磯村記念賞）の選考を行いました。以下、選考経過、選考結果、選考理由について報告致します。

1. 選考経過

委員会では、学会賞内規第6条（選考の方法）で定める(1)会員の自薦・他薦、(2)推薦委員による推薦、(3)学会事務局が会員を対象に行う文献調査によって作成された著作一覧をもとに、2019年1月から2020年12月末までに公刊された著書16件を審査の対象とした。なお、本審査対象については、内規第3条（受賞資格者および対象）の「原則として、日本都市社会学会個人会員の刊行された著書とする。ただし、編著・共著も対象にすることができる」という点に鑑み、単著以外も含めた。

第一段階として、2021年3月5日および3月29日にオンライン開催した委員会で16件を対象として第1次審査を行った結果、以下の6件に絞り込んだ。

- ・鰻坂学・西村雄郎・丸山真央・徳田剛編『さまよえる大都市・大阪―「都心回帰」とコミュニティ』東信堂、2019年5月。
- ・五十嵐泰正『上野新論』せりか書房、2019年12月。
- ・大谷信介『都市居住の社会学―社会調査から読み解く日本の住宅政策』ミネルヴァ書房、2020年10月。

- ・丹辺宣彦・中村麻理・山口博史編『変貌する豊田—グローバル化と社会の変化に直面するクルマのまち』東信堂、2020年2月。
- ・橋本健二・浅川達人編『格差社会と都市空間—東京圏の社会地図 1990-2010』鹿島出版会、2020年7月。
- ・町村敬志『都市に聴け—アーバン・スタディーズから読み解く東京』有斐閣、2020年12月。

選考委員は、全員がこの6著作に目を通して比較考量し、内規第7条（選考の基準）を拠り所にして評点を与え（5段階評価）、そのように評価した理由をコメントした審査票を作成し委員長に送付した（利益相反に該当する候補作の評価は辞退）。2021年7月11日にオンライン開催した委員会で、全委員の審査票を集約して作成した一覧表（無記名）をもとに慎重に審議した結果、内規第8条（受賞対象件数）に基づき、今回は1件を受賞作とすることに決定した（利益相反に該当する委員は審議を退席）。

2. 選考結果（受賞作）

- ・橋本健二・浅川達人編『格差社会と都市空間—東京圏の社会地図 1990-2010』鹿島出版会、2020年7月。

3. 選考理由

本書は、グローバル化や新自由主義の段階における東京圏の格差・貧困問題の深化を、社会地図とサーベイという手法を用いて空間的・社会的構造の変容として解明をした労作である。都市空間の把握と階級・階層論を緻密な形で結びつけることにより、格差拡大という言葉の背後にある都市的リアリティに重層的に迫ることに成功した点は、高く評価することができる。社会学と地理学を架橋し都市研究全体の発展にも寄与する実証的なマクロ分析として、今後も幅広く参照される研究となることが大いに期待される。なお以前に同賞を受賞した倉沢進・浅川達人編『新編東京圏の社会地図 1975-90』（2004年）との関連についても検討したが、本作は対象とする時期を異にすること、階級・階層面からの分析という独自の特徴を有することなどの理由により、授賞にふさわしいことを確認した。

以上の理由により、選考委員会は一致して、本書が第12回日本都市社会学賞（磯村記念賞）にふさわしい業績であることを認めるものである。

（学会賞選考委員長 町村敬志）

理事会報告

（1）2020-2021 年度第4回理事会報告

2020-2021 年度第4回理事会は、2021年9月10日（金）にZoomにて開催され、各種委員会報告の後、主に次年度予算案、次回理事会への引き継ぎ事項等について検討されました。

（2）2021-2022 年度第1回理事会報告

役員改選を受けての2021-2022 年度第1回理事会は、2021年9月11日に総会終了後にZoomにて開催され、理事の役割等が審議されました。下記をご参照ください。

（3）2021-2022 年度第2回理事会報告

2021-2022 年度第2回理事会は、2021年10月31日（日）にZoomにて開催され、各種委員会報告の後、主に改選後の理事、各種委員会委員の確認、今期理事会の取り組み事項、第40回大会（2022年度）等について検討されました。

（事務局担当理事 堤 圭史郎）

2021～2022 年度各種委員会構成

2021-22 年度の各種委員会の構成は以下の通りです。

【企画委員会】委員長：山口恵子、副委員長：山本かほり、担当理事：山本薫子、委員：川野英二、木田勇輔、金善美、松蘭祐子、西野淑美、伊藤泰郎、仙波希望、申恵媛、山本崇記

【編集委員会】委員長：五十嵐泰正、副委員長：二階堂裕子、担当理事：高木竜輔、委員：植田剛史、小山弘美、齊藤麻人、武田俊輔、中澤秀雄、濱田国佑、横田尚俊

【国際交流委員会】委員長：文貞實、委員：木田勇輔、金善美

【学会賞選考委員会】委員長：町村敬志

【社会学系コンソーシアム】担当理事：有末賢、堤 圭史郎

(事務局担当理事 堤 圭史郎)

企画委員会報告

例年、大会と合わせて行う企画委員会ですが、今回は委員全体での企画の反省や引きつぎはメーリングリスト上にて行い、9月12日に一部の委員にて、振り返りと次期委員の検討等を中心に、第1回委員会を行いました。その後、10月10日に第2回企画委員会を開催し、大会の振り返りと、今後2年間の大会企画の方針について協議しました。次回大会では、シンポジウム、テーマ部会、ラウンドテーブルを開催します。シンポジウムは、前回大会のテーマ部会であったコロナと社会をめぐる問題を発展させた内容を予定しています。テーマ部会では、人口移動を扱う予定です。ラウンドテーブルはこれまでの方針を継承し、大学院生などの新しい世代が主役になれるような場としたいと思います。加えて、大会とは別に来年の夏頃に、例会を開催することも検討しています。詳しくは次回の学会ニュースにてお知らせいたします。

(企画委員長 山口恵子)

国際交流委員会報告

来年度は、韓国地域社会学会での日本都市社会学会会員の参加、報告を予定しております。また、今後、海外の学会との研究交流のために、国際交流委員会、企画委員会とともにテーマや内容を検討し、充実した学術交流を進めていきたいと考えています。

(国際交流委員長 文貞實)

将来構想基金による国際学会参加支援の募集について

昨年度から将来構想基金を活用した会員の国際学会参加への支援を始めましたが、コロナ禍のため海外渡航が困難な見通しです。そこで今年度は学会参加ならびに海外雑誌への投稿の際のネイティブ・チェックの費用についても支援の対象とすることにいたしました。詳しくは以下の通りですので、奮ってご応募ください。

応募資格：常勤職にない（機関からの支援を期待できない）会員（院生を含む）で、2022年4月1日から2023年3月31日までの間に、海外で開催される国際学会(オンライン開催を含む)への参加、海外雑誌への投稿などを予定している者。

応募方法：応募を希望する者は以下の項目に関する申請書を作成し、期日までに提出すること。なお、申請書の書式については事務局に請求すること。

- ・参加国際学会名、開催地、開催時期、または投稿予定雑誌名
- ・航空券の購入費用の概算額またはネイティブ・チェックのための費用の概算額
- ・報告予定の有無、他に受けている支援の状況（学振等）、利用可能な研究費の実際、他に応募予定の支援の内容、に関する申告
- ・履歴書、業績リスト

支援の考え方：支援の総額である10万円を、応募者の中から2人ないし3人に、それぞれの航空券もしくはネイティブ・チェックの費用等に応じて配分する予定。したがって、あくまで費用の一部を支援するにとどまる。

選考方法：選考が必要になった場合、他に受けている支援の状況、報告予定の有無、応募者の業績などを総合的に勘案して、理事会で決定する。

応募締切：2022年1月31日。結果については、2～3月の理事会で決定し、すみやかに通知する。

留意事項：虚偽の申告をした場合、必要な申告を怠った場合、常勤職に就いた場合は支給を取り消すことがある。支援を受けた者は、参加した国際学会での経験を報告する文書または論文投稿の結果を提出しなければならない。その内容については学会ニュースに掲載する予定である。

問合せ、応募先：応募についての問合せおよび申請書の書式については学会事務局にメールで依頼すること。応募も、期日までに学会事務局宛、申請書、履歴書、業績リストの3点を添付したメールで行うこと。

(事務局担当理事 堤 圭史郎)

第9回日本都市社会学会若手奨励賞候補の文献調査および推薦に関するお願い

「日本都市社会学会若手奨励賞内規にもとづき、文献調査を行います。あわせて自薦・他薦の応募を受け付けます。若手奨励賞は「著書の部」と「論文の部」に分け、それぞれについて選考を行います。多くのみなさんからの応募をお待ちしています。

受賞対象及び資格者：今回、対象となるのは、(1) 2020年1月1日～2021年12月末日の2年間に発表された単著書(著書の部)と論文(論文の部)です。なお、2016年9月の総会で、若手奨励賞「論文の部」の受賞対象が、「原則として『日本都市社会学会年報』に掲載された単著論文とする。ただし、『日本都市社会学会年報』以外に発表された単著論文に関して、会員および推薦委員から推薦があった場合には対象に含める」と改定されております(内規3)。(2) 有資格者は共に、公刊時点で博士(後期)課程入学後10年以内であった日本都市社会学会会員です。

文献調査：上記の基準を満たす著書を発表した会員は、2022年1月末日までにオンライン上のフォーム(学会HPトップページからアクセス)よりお申し込みください。この情報は、選考対象の母集団を構成するものですので、条件を満たすすべての研究業績についてご記入下さい。

自薦・他薦：上記の基準を満たす著書のうち、同賞にふさわしい「都市社会学に関する学術の進歩発展に貢献したと認められる研究業績」(内規1)をご推薦下さい。会員であれば、だれでも推薦者となることができます。自薦も歓迎します。同封の調査用紙の自薦・他薦欄に所定事項をご記入の上、2022年1月末日までにオンライン上のフォーム(右QRコードか、学会HPトップページからアクセス)よりお申し込みください。



宛先・問い合わせ先：この件についてのお問い合わせは、学会事務局までe-mailでお願いいたします。学会事務局の連絡先は、本ニュース1頁目にあります。選考対象のリスト作成は、会員自身による文献調査報告や自薦がまずは基本となります。該当される方は、ぜひとも積極的に対応下さい。

その他：第9回日本都市社会学会若手奨励賞の選考結果については、2022年度の学会大会時に発表します。

(事務局担当理事 堤 圭史郎)

第8回震災問題研究交流会」開催のお知らせ

日本社会学会 防災学術連携体担当(連携委員)

震災問題研究ネットワーク代表 浦野正樹

震災問題研究交流会を、今年度、下記のとおり開催いたします。この交流会は、日本社会学会の研究活動委員会を中心に設けられた震災情報連絡会から発展したものです。現在は、日本社会学会理事会に防災学術連携体担当(連携委員)を置いておりますので、そこと震災問題研究ネットワークとの連携というかたちで開催いたします。今年度も、幅広い分野からの参加を歓迎いたします。

コロナ禍が進行し、幾度かの感染拡大の波が襲って先行きが未だ不透明な状況が続いております。また、近年は毎年のように台風や集中豪雨などによる風水害、土石流災害も頻発しています。本研究交流会では、東日本大震災に限らず、昨今の甚大な風水害、コロナ禍のなかで顕在化してきた社会課題など、災害と社会との関わりや影響を含め幅広い研究交流が出来ればと思っております。災害事象全般に関する報告を受け付けますので、是非下記の要領に従って、一般報告の申し込みをお願いいたします。この交流会では、発表者だけでなく、参加して一緒に討論していただける方、社会学者と一緒に議論してみたい他分野の研究者、行政担当者、マスコミ関係者、災害研究に関心をお持ちの方にも参加していただきたいと思っています。

※昨年までの研究交流会プログラムなどの情報、及び昨年度までの交流会報告書につきましては、次のリンク先からご覧いただけます。<https://greatearthquakeresearchnet.jimdo.com/>

なお、昨年度の報告書については、最終的な編集作業を進めているところです。

本交流会では、研究発表を募集して最新の研究動向を共有する時間を確保するとともに、今後の災害研究に関連する討論の時間となるべく確保するため2日間の日程としております。形式は、昨今の状況を鑑み、Zoomを用いた遠隔リアルタイム研究会として実施します。

初日の3月19日(土)は従来からの一般報告を中心にした研究報告会を行い、2日目の3月20日(日)は現在進めている科研費プロジェクトの公開報告会を兼ねた企画報告・検討会というかたちを取りたいと思います。

開催日時：2022年3月19日(土)～3月20日(日) 両日とも10:00～18:00を予定

形式：Zoomによる遠隔リアルタイム研究会

* 時間については、報告者の数などで若干変更することがあります。

* プログラムは、決定後に、参加者に連絡し、かつ震災問題研究ネットワークのウェブサイト(<https://greatearthquakeresearchnet.jimdo.com/>)にも掲載します。

＜＜研究発表・報告者の募集について＞＞

本交流会では、社会学および関連諸分野の研究発表を募集します。原則として、一般研究報告は2022年3月19日(土)となります。なお、発表時間などは、報告希望者の数により変動しますので、予めご了承ください。

近年は25本前後の報告が行なわれております。これまでと同様、報告の概要をまとめた報告書を後日、作成する予定です。

＜＜報告の申し込み方法＞＞

(1)お名前、(2)ご所属、(2)ご連絡先(Email アドレス)、(4)専門分野、(5)報告タイトル、(6)報告要旨(150字程度・形式自由)を、下記連絡先までEmailにてお知らせください。

報告申し込み締め切り：2022年1月28日(金)

報告申し込み先：震災問題研究交流会事務局(office150315dcworkshop@gmail.com)

※ Emailのタイトルには「震災問題研究交流会報告申込」と記入してください。

※ (1)(2)について共同報告者がいる場合は、共同報告者の情報もすべて記入いただいたうえで、筆頭報告者に丸をつけてください。

『日本都市社会学会年報』40号 自由投稿論文・研究ノート募集について 【募集】

編集委員会では、『日本都市社会学会年報』第40号（2022年9月発行予定）に掲載する「自由投稿論文」、「研究ノート」および「書評リプライ」の原稿を募集します。会員諸氏の、奮っての投稿をお待ちしています。投稿を希望される方は、『年報39号』（2021年発行）に掲載されている投稿規定および執筆要項を遵守した原稿を作成のうえ、**審査用原稿（3部）を2021年11月30日まで（消印有効）**に、下記の編集委員会事務局宛に郵送してください。なお、投稿資格のないもの、**投稿期限を過ぎたものは一切受け付けられません**ので、くれぐれもご注意ください。なお、在宅勤務となる事態に鑑み、連絡先電話（研究室）の記載は割愛させていただきました。お問い合わせは電子メールにてお願いいたします。

※9月大会から新たな編集委員会が発足し、論文投稿先が下記に変更されましたのでご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学人文社会系棟A417
五十嵐泰正研究室 日本都市社会学会編集委員会事務局
E-mail: igarashi.yasumasa.fn@u.tsukuba.ac.jp

（編集委員長 五十嵐泰正）

会員異動

新入会員

（2021年9月2日理事会承認）

<東北地区>

大井 慈郎（岩手保健医療大学）

（2021年10月31日理事会承認）

<東北地区>

傅 昱（東北大学大学院）

連絡先不明 瀬古 武志（再掲）

（事務局担当理事 堤 圭史郎）

会員の皆さまへのお知らせ

コロナ禍にともなう院生会員・常勤職にない会員の学会費減額について（再掲）

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて、大学院生や常勤職にない会員が経済状態の悪化によって研究継続が困難になる可能性に配慮し、2021年度の学会費の減額申請をオンラインで受け付けています。減額を希望される方は申し込みフォーム（<https://forms.gle/G4V9r4V6RbnKg1HB8>）からお申し込みください。

QRコードは以下掲載の通りです。

対象：学生会員（日本学術振興会特別研究員は除く）および常勤職にない会員（退職者を含む）

金額：一般会員 6,500円を4,000円に減額。学生会員 4,000円を2,000円に減額。

申込締め切り：2021年12月末

入会金および2020年度以前の年会費は減額の対象になっていません。



（事務局担当理事 堤 圭史郎）

学会事務局からのお知らせ

◆ 2021 年度 会費納入のお願い

年会費は一般会員が 6,500 円、学生会員が 4,000 円となっております。なお、本頁にありますように、コロナ禍にともなう院生会員・常勤職にない会員の学会費減額を行なっています。

外国籍会員の場合、年会費減額の措置が適用される場合もあります。詳しくは、学会のホームページをご参照ください。

2020 年度までの学会費をまだ納入されていない会員の皆様は、お早めに納入くださいますようお願い申し上げます。極力、全額の納入をお願いいたしますが、単年度分の振込につきましてもお受けいたしますので、是非とも納入していただきますよう重ねてお願い申し上げます。継続して 3 年以上会費を滞納した場合、原則として会員の資格を失うこととなりますので（学会規約 12 条）、その旨ご留意ください。

本学会が利用しておりますゆうちょ銀行は、全国の金融機関（一部を除く）との相互振込が可能です。他の金融機関から本学会の口座に振り込む場合は、以下の店名・預金種類・口座番号・受取人名をご指定ください。

銀行名	ゆうちょ銀行.....預金種類	当座
	金融機関コード.....9900	口座番号.....0703976
	店番.....019	受取人名.....ニホントシシヤカイガッカイ
	店名（カナ）.....〇一九（ゼロイチキュウ店）	

◆ ご所属先等変更のご連絡のお願い

ご所属先やご住所等が変更となられた会員の皆様もおられるかと思います。その場合は、事務局へ E メールにてご連絡くださいますよう、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。

◆ ごあいさつ

このたび学会事務局が移転し、2021 年度から 2 年間、福岡県立大学人間社会学部公共社会学科堤圭史郎研究室にて事務局を担当することになりました。なお、学会ニュース 1 ページ目に新事務局の連絡先が掲載されていますが、会員の皆様からのお問い合わせやご連絡に関しては、前事務局同様、e-mail にてお願いできましたら幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（事務局担当理事 堤 圭史郎）